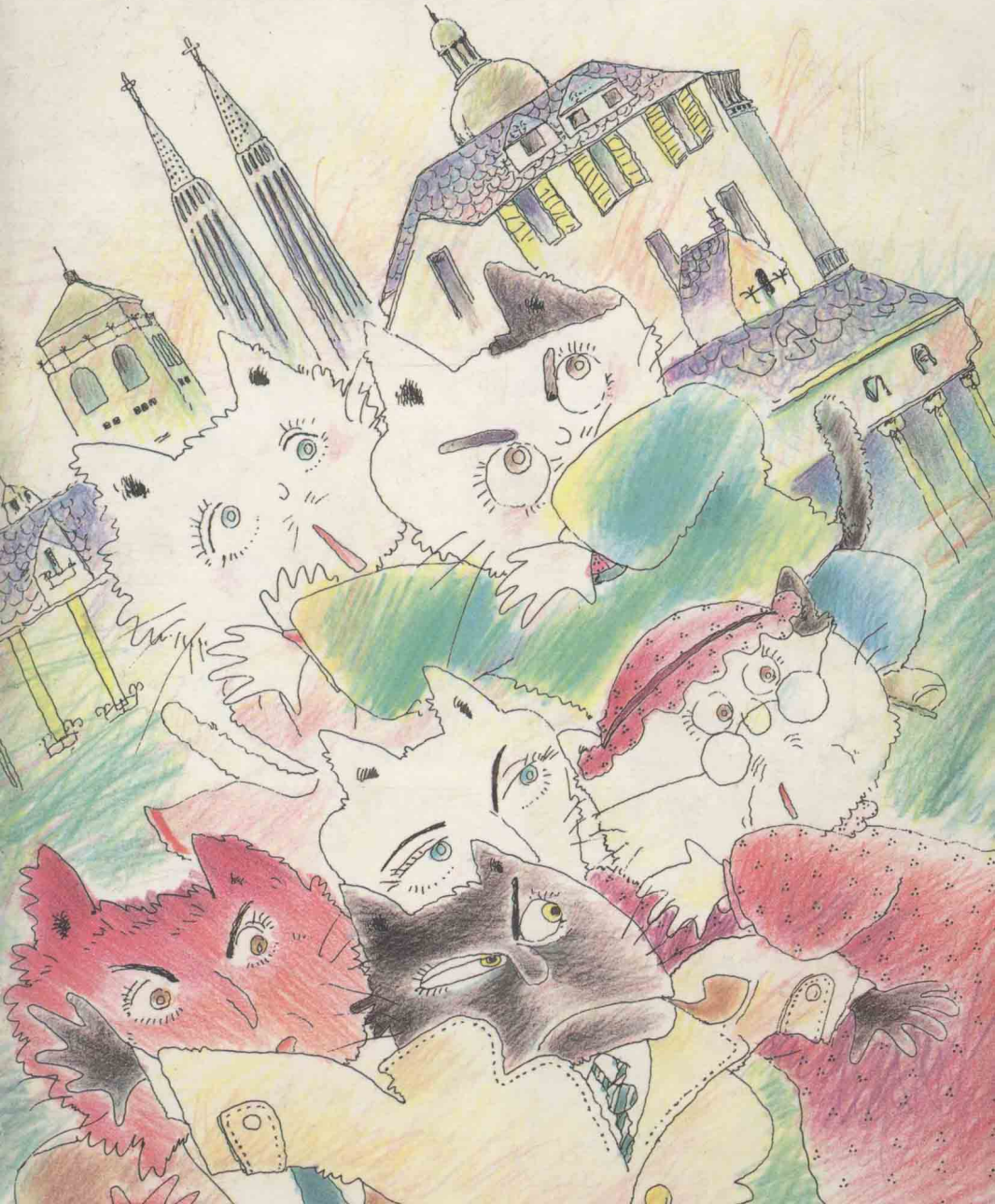
ねこのニャポン国物語

赤毛のドモンジョ探偵塾

手島 悠介・作　つぼの ひでお・絵



ねこのニャポン国物語

赤毛のドモンジ探偵塾

手島 悠介・作　つぼの ひでお・絵

児童文学創作シリーズ

ねこのニャポン国物語
赤毛のドモンジョ探偵塾

1987年7月19日　初版第1刷発行

定価1000円
著　者　手島悠介
発行者　加藤勝久
発行所　株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21(郵便番号112)
電話　東京03(945)1111(大代表)
N.D.C.913　254p　22cm
印刷所　豊国印刷株式会社
半七写真印刷株式会社
製本所　黒柳製本株式会社

©Yûsuke Tesima 1987 Printed in Japan

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。
送料小社負担にておとりかえします。

ISBN4-06-133506-5　(0)　(児企)

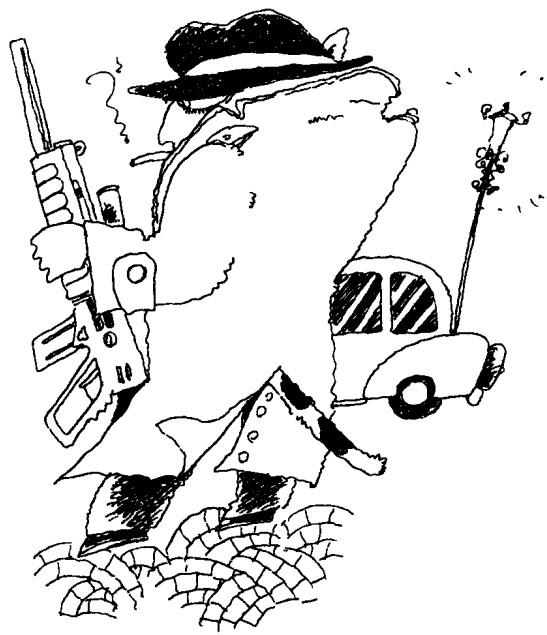
もくじ

第1章……9
ンヤンは、とんな少年か？
おかしなトモンノヨ先生にあい、
探偵塾をすすめられるか……。
第2章……17
フローラからきいた、
おもしろそうなどろぼう塾の話。
フローラは、いったいどんな少女なのか？
第3章……40
子ともたちは、
怪盗アルセーニ＝カルハンになりたいのか？
ンヤン、はしめて「とろぼう塾」へ……。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第4章……60
「聖者のなみた」の奇跡とはなに？
夕くれのあやしい人かけ、
あやしいマンションのうつろなまど……。
第5章……82
「聖者のなみたかほしい。」
フローラはいった。
シャンをたすねてきたトモンジョ先生は、
どんな人物か？

第6章……112
二回目の「とろぼう塾」と、
フローラのきてくれた誕生日会。
てもそこに、コルコス暗殺の手か！　……。
第7章……147
退院のよろこひのあとに、
なんとパンゲ二世のかくされた秘密か……。
そして、フローラはどこへいったか？
第8章……180
くらい月曜日、
「聖者のなみた」かぬすまれていた。
アノテンホロー刑事か、フローラをさかして……。



第9章……198

パンゲ家にメンハーはそろった。
フローラは、やはり犯人なのか？
あばかれていくトモンンョ先生の秘密……。

第10章……223

刑事のしかけたわなに、かかったのはだれ？
とけていくなぞ。
そして、トモンジョ先生のなみた……。

あとかき……250

あなたは、ねこ族ですか？

おもな登場人物

●ジャン

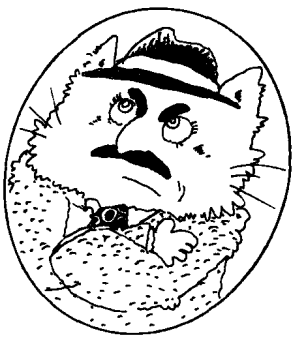
港小学校の6年生。両親はいないが，新聞配達のアルバイトをしながら，おばあさんと楽しくくらしている。

●フローラ

アルプの国から亡命してきた，ジャンの同級生。明るい少女だが，ときおり，くらい表情を見せる。

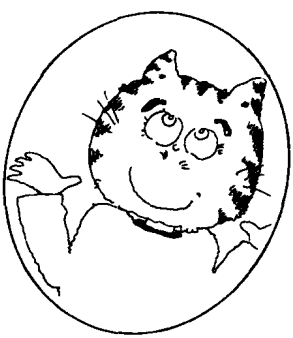
●おばあさん

やさしくて，はたらきもののジャンの大すきなおばあさん。



●ゴルゴス

フローラのお父さん。アルプのすぐれた政治家だが，フローラをつれて，ニャポン国へ亡命してきた。



●ベントン

ジャンの親友。陽気で，たのもしい男の子。

●シャピロ

わかくて品のよい，ヨークハーマー大学の学生。ドモンジョ探偵塾の優秀な生徒でもある。

●アッテンボロー刑事

青っぽい金色の目をした刑事。いつも，マドロスパイプをくわえている。

●ドモンジョ先生

あざやかな朱色の毛なみをした，探偵塾の先生。ゆかいな授業で，毎回，生徒たちを楽しませている。

〈注〉ニャポン国では，「人」という字を「ニャン」と読む。これは，ニャポン国だけに通用するものである。

ねこのニャポン国物語

赤毛のドモンジョ探偵塾

手島 悠介・作　つぼの ひでお・絵

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第１章

ジャンは，どんな少年か？　おかしなドモンジョ先生にあい，探偵塾をすすめられるが……。

ぼくの名まえは、ジャン。ここ、ねこの国ニャポンの、ちょっと有名な港町――ヨーク ハーマーにすんでいる小学生だ。

ごくふつうの小学生――学習塾にかよったり、パソコンに熱をあげたりしているような、ごくあたりまえの男の子っていいたいんだけど、ぼくには両親がいない。

やっとぼくか、「ママ。」「パパ。」といえるようになったころ、船乗りだったパパは、船の事故でなくなってしまった。ママも、そのかなしみから病気になって、パパのあとをおうようになくなってしまったんだ。

そのころ、コベーユという、やはり港町にすんでいたそうで、ママにだかれて、うっとりとしているような思い出――どこかの遊園地で、パパと三人、赤や銀にきらきら光る乗りものにのったような記憶――。

そんなあまずっぱい、ミルクのにおいのするような、わすれられない思い出のかけらみたいなものが、のこっ

ているような気かするんだけど、きっとそれは、おばあさんの話や、のこされた写真から、かってにぼくがつくりあげた、まぼろしのようなものかもしれない。

でも、外国の港の風景をえがいたパパからの絵はがきや、ほんとうにわずかしかないパパとママの写真――お宮参りの神社や公園で、ぼくをたいせつそうにだいてわらっている、親子三人の写真とおなじように、そんな思い出のかけらを、心のなかにだいじにしまっているんだ。

小学校三年生のとき、ヨークハーマーにひっこしてきたんだけど、ずっとぼくをそだててくれているのは、おばあさんだ。

おばあさんの仕事は、あみもの――。ぼくが物心ついたときから、おばあさんは、まるで童話の登場人物みたいに、古いすにこしをかけ、まるい小さなめかねをかけて、あみものをしていた。明るくて、冗談ずきで、はたらきもので、ちょっとふとっていて、世界でいちばん、ぼくの大すきな人だ。

〈おばあさんっ子は、三ドランのそん。（トランとは、ねこの国でのお金をかぞえる単位）〉という、ことわざがある。孫は、おばあさんにただあまやかされて、ひとりだちできないような子どもにそだてられてしまうという意味らしいけど、おばあさんにも、ぼくにも、このことわざはあてはまらないと思っている。

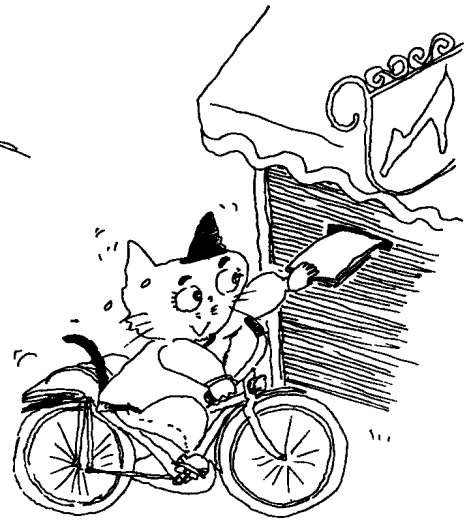
おばあさんには、びっくりするようなきびしいところがあるし、ぼくだって（それはすこしは、気の弱いところがあるけれども）、あまえたいような気持ちになるときは、自分で自分をしかることにしているんだ。

ぼくは毎朝、学校へいくまえに、朝の新聞配達のアルバイトをしている。新聞配達をしている小学生なんて、ヨークハーマー市にも、きっと何人もいないだろう。友だちのなかには、アルバイトのことで、からかったりする人もいるけれど、ぼくは相手にしない。ぼくは、はたらくことがすきなんだ。

こんど、アルバイト代をもらったら、おばあさんの六十六さいの誕生日――なんとこの日は、ぼくの十二さいの誕生日でもあるんだ――に、なにかかわいい鉢植えの花をプレゼントしようと考えている。おばあさんは花がすきで、小さなマンションのベランダは、春から秋まで、いつも色とりどりの花でいっぱいなんだもの……。

その朝、港はいちめんのこいもやに目かくしされ、とじこめられているみたいだった。いま、のぼったばかりの朝日をうけて、金色にかがやきはじめたもやのなかで、船やボートは、まだねむりつづけていた。

メリー波止場に停泊している、外国の豪華客船も、大きなはい色のかげとなって、長い旅のつ

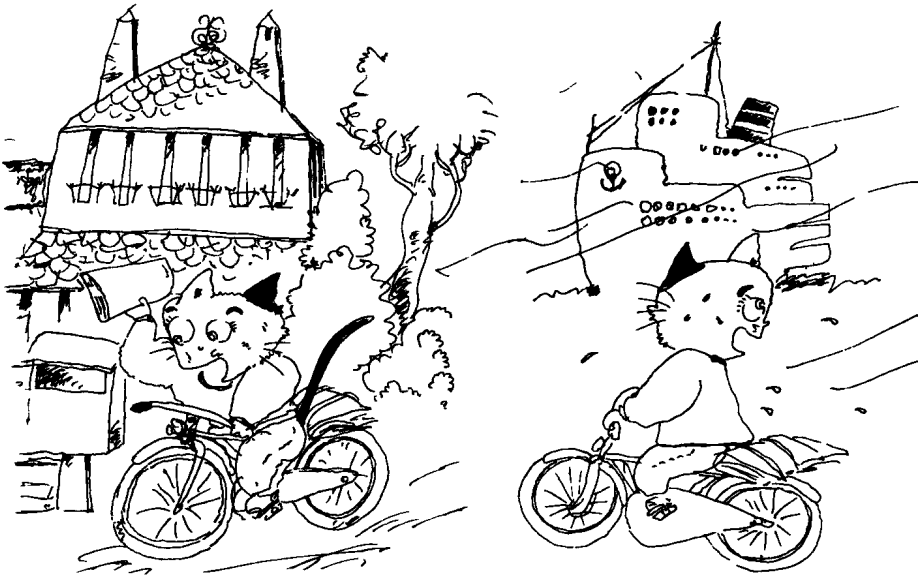


かれを休めているように見えた。

ぼくははじめ、山下町商店街の、とざされたシャッターの郵便受けに、一けん一けん、朝刊をいれていく。それから、この山下公園へと自転車をとばしてくるんだ。タールのにおいのまざった潮のかおりが、つんと鼻をつき、しずかな波の音が、ゆっくりしたリズムをきざんでいる。ぼくはこの港のにおいが、たまらなくすきなんだ。やっぱり、船乗りだったパパの血が、ぼくのからだをながれているんだろうか？

公園のしゃれたレストラン、あざらし亭へと、やっと足のとどくペダルをこいでいく。裏口のペンキのはげた郵便受けに、バサッと新聞をなげこんだら、ぼくの毎朝の仕事はおわりになる。

このさいごの配達をおわると、いつものことだけど、ほっとして、とってもみちたりた気持ちに



なる。そしてこのころ、山の手町の丘の上の聖ガーアンジ寺院の朝の鐘が、鳴りわたる。すんだ鐘の音は、市内のいくつかの丘にこだましながら、ひびいてくる。きっと港の船々にまでも、とどいているだろう。

あざらし亭のまえで、自転車にのろうとしたら、とつぜん、うしろからあいさつされた。

「おはよう。えらいんたねえ。」

ふりむくと、ジョギングすかたの体格のいい、知らない赤毛のおじさんが立っていた。そめているのかもしれないけど、長毛の、ほんとにあざやかな朱の色た。綿のような毛先が、朝日をあびて、もえるようにかがやいている。

「おはようございます。」ぼくもいった。

「きみ、小学生だろう。えらいんだねえ。」赤毛のおじさんは、人がよさそうにわらいながらいっ

た。「きみは、ドモンジョ塾を知ってるかな？」
「知ってますよ。山の手町の丘のむこうのパンゲ児童館で、フー拳をやってる塾でしょう？」
「そうだよ。フー拳のほかに、探偵塾もはじめてるんだけど、知らないかな？　わたしが、ドモンジョ塾のドモンジョだが、子どもたちはかげで、赤毛のドモンジョ先生だなんて、よんでるらしい。」ドモンジョ先生は、きれいな赤毛をふるわせてわらった。
「探偵塾ですって？」
「きみも探偵はすきかな？　ドモンジョ先生のどろぼう塾っていってる子もいるらしいよ。」ドモンジョ先生は、楽しそうにいった。「探偵塾は、月水金だからね。きみもくるといい。フー拳は、火木土……。」
フー拳の「フー」とは、人のはく息のことだ。拳は、拳法の「拳（こぶし）」。フー拳とは、呼吸法と、拳とを組みあわせた拳法の一つで、むかしは格闘技だったらしいけれど、いまでは、健康のための体操みたいなものだ。
「きみは港小学校の生徒だろう？　名まえはなんていうの？」ドモンジョ先生がきいた。
「ジャンです。」
「ジャンか。いい名まえだね。名字はなに？」
「アーバンです。ジャン＝アーバン。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com